

2016 年 4 月 15 日
受付番号 ()

(参考) 平成 27 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2016 年 4 月 28 日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2016 年 4 月 28 日

採択研究題目	東アジア域内を対象とする異文化コミュニケーション研究—ディスコースの日韓比較							
講座・コース名	メディア・コミュニケーション部門・言語伝達論分野							
代表者	鈴木 志のぶ							
連絡先	内線: 5385			email: shinobu@imc.hokudai.ac.jp				
共同研究メンバー	鈴木 志のぶ 言語伝達論分野・教授 (研究の統括、議論構造研究担当) 李 鳳 言語習得論分野・助教 (ヘッジ研究担当、議論構造研究の監修) 金 ソンミン 国際地域文化論分野・准教授 (研究の監修)							
研究協力者	李 相哲 (Lee, Sang-Chul) 成均館大 (韓国)・教授 (研究の監修、データ収集)							
採択総額 (千円)	600							
使 途 の 明 細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	成果発表 (9/19 町田市)	76.610			書籍 (7 冊)	110.111	論文英文校正 (2 件)	73.114
	(10/4 天理市)	58.770			韓日翻訳謝 金 (1 件)	209.360	消耗品	64.711
							学会参加費	2.0
							学会年会費	5.324
	計	135.38	計	0	計	319.471	計	145.149
予算総額 600 - 決算総額 600 = 0								
研究概要	このプロジェクトは、日韓のディスコースの差異を明らかにすることを目的とし、東アジア域内における異文化コミュニケーション研究と位置付けられる。本プロジェクトは、特に日韓の議論の構造とヘッジ (断言や直接的表現を和らげる表現) についての差異を明らかにすることを二本の柱とする。 議論とは日常的に様々な場面で合意形成を助ける重要なコミュニケーション行動である。議論の文化差に関する研究は、異文化の人々が接触・交流する際に生じるコミュニケーション上の問題を理解する手掛かりとなる。また、この研究は西洋を中心に構築されて来た議論に関する理論的枠組みの妥当性を検証することにもつながる。ヘッジ表現はどの言語にもある普遍的な語用論的現象である。しかし、その実現方法やヘッジが使われるべき適切な量についての認識には文化間の差があると考えられるが、この点についての研究は不足している。 以上二つのコミュニケーション行為に関し、先行研究は異文化間の差異を西洋対東洋という極めて大まかな枠組みの中でのみ捉える傾向があった。それに対し、本研究は、東アジアの二カ国 (特に日本と韓国) に焦点を絞り、議論構造およびヘッジ使用の類似点・相違点を詳細かつ体系的に分析する。日本と韓国は文化的に共通点が多いが、歴史・思想等の違い (例えば孔子思想の影響・浸透度など) による価値観の違いなど) によりコミュニケーション行動には違いがあると予測される。実際、李 (2009) の研究はすでにその予測を一部裏付ける手がかりを							

	提供している。それらの相違が日韓の交流・交渉上の障害を作る隠れた原因となっていることは十分に考えられる。本研究は、議論とヘッジ表現について、日韓の文化に固有の特徴と共通点を明らかにし、相互理解と円滑なコミュニケーションの促進に資するものである。また、本研究をきっかけとした東アジア域内の異文化コミュニケーション研究の展開も期待される。
研究実績・内容	<u>議論構造の日韓対照研究</u>: 2016年1月までに、質問紙の韓国語翻訳、人間を実験調査等の直接対象とする研究審査の承認、韓国成均館大学においてデータ（67名分の回答）収集を完了、2016年2月までに質問紙の韓日翻訳、3月-現在までデータ分析を行う。これらデータをすでに収集した日米のデータと比較した結果、判明したことは次の通りである。 議論の構造を大きく2つの次元（直接的-間接的；複雑-簡潔）で捉えた4つの異なる指標の数値を比較したところ、いずれの指標においても、米韓は相対的に直接的・複雑な議論の構造を示し、二国間に差異が見られなかったのに対し、日本のデータは米韓いずれとも異なり、より間接的で簡潔な構造を示すことが分かった。この結果は、これまでの異文化コミュニケーション研究で、米国を含む西洋諸国と比較すると、類似点が多く指摘されてきた日韓の二つの文化圏において、議論というコミュニケーション行動に関しては共通点よりも相違点が際立っているという、予測に反した結果が得られたということが出来る。詳細な分析と考察は論文にまとめ、2016年9月に開催される異文化コミュニケーション学会で発表の予定である。 <u>ヘッジの日韓対照研究</u>: 日韓の「許可求め」の使役形の使用範囲には違いがあることが示されたが、理論的な枠組みが欠けていたため、体系的に比較することができなかった。本発表では、Brown & Levinson (1978/1987)の「フェイス侵害度見積もり公式」を理論的な枠組みとして用いて、「-(サ)セル」と「-게 하다」との間にある類似性と相違を考察した。そして、同じ行動でも日韓の文化による相手にかかる負荷度(Rx)という変数の差によって、ポライトネスの表現方法が大きく異なることを説明した。この研究は、下記の口頭発表3で発表された。
研究成果・業績等	<u>論文</u> 1. Suzuki, Shinobu, “Discrepancy models of belief and confidence change: A test of information processing and self-validation predictions,” <i>Communication Research</i>. (条件付採択：改訂中) <u>口頭発表</u> 1. 6/13/2015 日本コミュニケーション学会年次大会（南山大学） 鈴木志のぶ「議論の構造的差異を説明する新たなモデル：オンライン・コミュニケーションの場合」 2. 9/19/2015 異文化コミュニケーション学会（桜美林大学） 鈴木志のぶ「オンラインの議論による参加者の認知的変化」 3. 10/4/2016 朝鮮学会第66回大会（天理大学） 李鳳「『許可求め』の使役形の『-(サ)セル』と『-게 하다』—ポライトネス理論の観点から—」 4. (採択：6/10/2016 発表予定) Suzuki, Shinobu “Discrepancy models of belief and confidence change: A test of information processing and self-validation predictions,” 2016 Annual Convention of the International Communication Association（福岡市）（口頭発表2を改訂）

（A4判2頁以内で作成してください）

2016 年 4 月 15 日
受付番号 ()

(参考) 平成 27 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2016 年 4 月 28 日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2016 年 4 月 28 日

採択研究題目	リスク・プロジェクト (リスク、政治、災害)							
講座・コース名	公共伝達論／国際広報論／外国語教育研究部／北海道文教大学							
代表者	辻本 篤							
連絡先	内線:5361				email: tsujimoto@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	1. リスクと公共性・政治性分野 (理論研究) ・鈴木純一 (公共伝達論・教授) ・長島美織 (公共伝達論・教授) ・Piers Williamson (外国語教育研究部・特任准教授) ・王 瞻 (国際広報メディア専攻・博士課程) ・糸川悦子 (国際広報メディア専攻・博士課程) ・市原攝子 (国際広報メディア専攻・博士課程) 2. 災害 (特に原発災害) とリスク分野 (実証研究) ・伊藤直哉 (国際広報論分野・教授) ・辻本篤 (国際広報論分野・准教授)							
研究協力者	渡部淳 (北海道文教大学・講師) Yiwei Li (慶応大学・助教)							
採 択 総 額 (千円)	700							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
			ウクライナ現地調査費用	298			インターネット調査費用	399
	計		計		計		計	
	予算総額 700 ー 決算総額 697 = 3							
研究概要	1. リスクと公共性・政治性分野 (理論研究) 現代, 様々な観点からリスクと社会性 (公共性／政治性) のあり方が, ウルリッヒ・ベックやニクラス・ルーマン, ミシェル・フーコー等の考え方を敷衍する形で模索されている。この問題意識の現代的意義を問う。特に「リスク」という言葉の機能拡大, リスク問題の政治性 (ステークホルダーを巻き込んだ議論のあり方) を中心に議論を進めている。 2. 災害 (特に原発災害) とリスク分野 (実証研究) 本研究分野では, おもに原子力発電所 (福島第一原発, チェルノブイリ原発) の災害に係るリスク認知に対して実証研究を進めている。							

研究実績・内容	1. 研究会の開催 1-1. 王 瞻（本学院 国際広報メディア専攻・博士課程）の研究発表（2015 年 9 月 15 日（火））, 「圧縮された近代における再帰性」 1-2. グレン・D・フック（シェフィールド大学 教授）の講演（2105 年 3 月 19 日（土））, <i>Everyday Risk and U.S. Base in Okinawa: Whither Environmental Security</i> 1-3. 渡部 淳（北海道文教大学・講師）の研究発表(2015 年 3 月 30 日（水）） 「「災後」日本の民主主義におけるサブ・ポリティクスの展望－政治的コミュニケーションの公共圏と司法・メディア・市民」 2. 社会調査の実施 2-1 「日本人リスク情報調査」に関する調査。 *目的：日本人の一般消費者におけるリスク情報の収集、信頼構築、リスク認知形成に関する関係性を解明することを目的とした（インターネット調査, 有効サンプル数：992）。 2-1 ウクライナ・キエフでの現地調査 *目的：本調査は 2014 年からの継続的に進めているチェルノブイリ原発事故に関する意識調査である。調査結果を発展的に福島原発事故の被災者意識の検討へ結びつける予定である。
研究成果・業績等	・ Minori NAGASHIMA, Piers Williamson, “Risk Communication and the Disposal of Radioactive Debris: Answering Questions Without Questioning Answers”, <i>Social Science Japan Journal</i> (now under peer review) 下記はすべて著書 <i>Uncertainty and Catastrophe Management : The 2011 Great East Japan Earthquake and Beyond</i>, World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd, 2015 に所収済。 ・ Naoya ITO “Roadmap to Decommissioning : Phase 1 Challenge: Contaminated Water Treatment”, pp.60-63. ・ Naoya ITO “Roadmap to Decommissioning : Phase 2 Challenge: Securing Highly Experienced Workers“, pp.64-66. ・ Naoya ITO “Radioactive Diffusion Through the Wind : SPEEDI Could Not be Utilized to Predict the Fukushima Daiichi Nuclear Disaster”, pp.67-70. ・ Naoya ITO “Risk Perception of Nuclear Disaster: How Did the Coverage of the Disaster Impact Neighboring Countries?”, pp.71-74. ・ Atsushi TSUJIMOTO “The Role of Science Museums Exhibiting Disaster Artifacts”, pp.75-77. ・ Atsushi TSUJIMOTO “Risk-Perception Gap in the Fukushima Daiichi Nuclear Disaster”, pp.78-80. ・ Atsushi TSUJIMOTO “Information Sharing in the 2013 Ukrainian Protests”, pp.162-164. ・ Atsushi TSUJIMOTO “Public Relations Theory in Business Continuity Management”, pp.274-276. ・ Yiwei LI “What Do the Elderly Need to Do to Plan for Disasters? “, pp.50-51. ・ Yiwei LI “How a Disaster Can Be Turned Into a Lesson”, pp.52-54. ・ Yiwei LI “How Can Science Museums Contribute to the Popularization of Science Knowledge? “, pp.149-151. ・ Yiwei LI “How Can Social Networking Services Support Management of Public Health Issues?”, pp.152-154. ・ Yiwei LI “What Criteria Should the Laypeople Use to Assess Risks?”, pp.155-157.

受付番号 ()

(参考) 平成27年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2016年4月28日締切。総務担当へ電子提出する。) 提出日 2016年4月 27日

採択研究題目	『札幌・サハリン・安山のサハリン帰国者一日ロ韓のトランスナショナルなアイデンティティ』出版計画							
講座・コース名	メディア文化論・多元文化論							
代表者	玄武岩							
連絡先	内線: 6937				email: gen@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	玄武岩 (メディア文化論分野・准教授) インタビュー・執筆 宇佐見森吉 (メディア文化論分野・教授) インタビュー・校正 ジェフリー・ゲーマン (多元文化論講座・准教授) 多言語・多文化教育の視点からの分析 パイチャゼ・スヴェトラナ (学術研究員) インタビュー・執筆 後藤悠樹 (写真作家) 写真撮影							
研究協力者	(所属・身分)							
採択総額 (千円)	1,600 千円							
使 途 の 明 細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	東京-札幌×1	69	札幌-安山×2	244			テープ起こし	78
	札幌-千葉×1	104					学 会 参 加 費×2	42
	千葉-札幌×1	42					出 版 助 成 金	1,000
	札幌-東京×1	20						
	計	235	計	244	計		計	1,120
	予算総額 1,600 — 決算総額 1,599 = 1 (240 円)							
研究概要	サハリンで交錯する日韓の「残留者」たちのトランスナショナルな生活世界を、北海道・安山・サハリンに暮らす人びとのインタビューをとおして描き、その成果を一般向け書籍として出版する。							
研究実績・内容	平成 26 年度に始まった本共同研究プロジェクトの後続のインタビューを実施した。北海道と仁川・金浦 (韓国)、そしてサハリンで一通り現地調査をおよびインタビューを実施したが、夫とともに安山に永住帰国した日本人女性や、札幌の帰国者の 2 世や 3 世たちの調査が残されていた。27 年度は前年に引き続き、これらの調査を実施した。 研究活動としては、それまでの調査によって得られた知見を、パイチャゼ研究員とサハリン歴史史料館に勤務して本研究において史料の提供など協力をいただいたディン・ユリア氏が、第 9 回国際中欧・東欧研究協議会世界大会 (千葉) に参加して、ソウルと札幌の「ロシア学校」におけるサハリン帰国者 3 世の教育の特性について共同発表をした。また、続けてディン・ユリア氏を札幌に招き、ゲーマン准教授が主催するエスニック・マイノリティの多言語・多文化教育に関する「日本と韓国における帰国児童生徒の教育問題」ワークショップ							

	プを開催した。 これらの研究活動は、帰国者 2 世および 3 世の若い世代のアイデンティティを理解するうえで重要な意味をも。それによって、本研究は帰国者本人やその同伴家族の子ども世代だけでなく、帰国者の孫世代にあたる 10 代～20 代の若い世代にも注目することができた。
研究成果・業績等	以上の調査・研究の成果をベースにして、2016 年 3 月に高文研より『サハリン残留一日韓口 百年にわたる家族物語』を出版した。国家に翻弄されながらも、「国境」を超え、「多文化」のなかでたくましく生きる 10 の家族の物語からなる本書は、第 1 部「家族」と暮らす、第 2 部「国境」を超える、第 3 部サハリンで生きる、の 3 部構成となっており、またサハリン残留〈日本人〉の歴史的背景の理解のためサハリン／樺太の歴史的 position を記した「解説」を配した。全 256 頁で、全体の目次は以下のとおりである。 第 1 部「家族」と暮らす 日・韓・ロ三国に広がる生活空間 戦後サハリンで生き抜いた母と帰国三世の孫のアイデンティティ 「永住帰国」の道を切り拓いた人生 三つの文化のなかで子育てする帰国三世) 第 2 部「国境」を超える 亡き母の望郷の思いを抱きしめて生きる娘 サハリン・北海道・仁川を行き来する 韓国に「永住帰国」した日本人女性 第 3 部 サハリンで生きる トマリの土になる 実の父と母を抱きしめたい 私の「故郷」はサハリン 解 説 サハリンで交錯する日韓口の「残留者」たち 本書の出版記念会として、5 月 29 日には紀伊國屋書店札幌本店で著者の玄とパイチャゼ、および写真を担当した後藤が参加するトークイベントを開催する予定である。

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

受付番号 ()

(参考) 平成 27 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2016 年 4 月 28 日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2016 年 4 月 23 日

採択研究題目	日中韓共同研究「Traveling Asia and Geographical Imaginaries」							
講座・コース名	観光文化論講座・メディア文化論講座・東アジアメディア研究センター							
代表者	金ソンミン							
連絡先	内線: 5393				email: kim@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	金成玟(観光文化論講座 准教授) メディア文化研究、東アジア大衆文化論 岡本亮輔(観光文化論講座 准教授) 宗教社会学、聖地観光論 周倩(メディア文化論講座 助教) メディア社会学、日中比較社会学							
研究協力者	(所属・身分)							
採択総額(千円)	900							
使途の明細(千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	登壇者招 聘、打ち 合わせな ど	200	登壇者 招聘、国 際シン ポジウ ム参加、 調査な ど	600	書籍、共 同研究会 の謝金な ど	100		
	計	200	計	600	計	100	計	
	予算総額 900－ 決算総額 900 = 0							
研究概要	本共同研究は、「東アジア」と「観光文化」を主なキーワードに、近年の東アジアにおける観光をめぐる諸現象に多角的に光を当て、東アジアという地理的・歴史的空間がどのように再構築され、文化的に想像されているのかを明らかにすることを目的とする日中韓共同研究である。そのため、国内の研究シンポジウム、韓国ソウル大とのジョイント・シンポジウム、国際シンポジウムなどを企画・開催し、国際的な研究の蓄積や活発な学術的発信を試みた。またソウル大、中山大と日中韓同時出版を進めることに合意するなど、国際的な研究ネットワークの構築を行うことができた。							
研究実績・内容	① シンポジウム 「観光空間としての東アジア East Asia as a Tourism Space」開催。2015 年 8 月 1 日、北海道大学。(共催：東アジアメディア研究センター) 【概要】国内で研究活動を行っている日中韓の研究者が集まり、軍艦島、沖縄の戦跡、聖地、皇居ラン、国際関係、階級、地域、アートなどさまざまな観光文化を切り口に東アジアのあり方について考察した。登壇者は、木村至聖(甲南女子大学)、栗津賢太(南山大学)、新倉貴仁(成城大学)、岡本亮輔、麻生美希、朴炫貞、周倩、金成玟(以上、北海道大学)。 ② 北海道大学-ソウル大学ジョイント・シンポジウム「Traveling Asia and Geographical Imaginaries」(2015 年 11 月 27 日、ソウル大学)を企画し参加。							

	【概要】日本、韓国、トルコなどからの研究者が、「中国人観光客の経験と自己認識」「日本のナショナリズムと聖なる場所」「中国ミドルクラスの観光経験」「日本における中国人観光客」「トルコの観光産業におけるアジア認識」をテーマに5つの発表を行った。シンポジウム前のソウル大アジア研究所との会議では、今回の成果を今後ジャーナルや書籍の出版などの形で発信することに合意した。登壇者は、Myungkoo KANG, Eun Young NAM (Seoul National University) OKAMOTO Ryosuke (Hokkaido University) ZHOU Qian (Hokkaido University) HWANG Seongbin (Rikkyo University) Hasan Efe SEVIN (Kadir Has University)。 ③ 国際シンポジウム「Re-thinking Tourism in East Asia」(2016年3月12日、北海道大学)を開催。 【概要】東アジア観光文化研究会が主催した日中韓国際シンポジウムで、韓国のソウル大に加え、中国の中山大学とともに、日本、韓国、中国、台湾等の観光文化に関する発表と討論を行った。今後共同研究を継続するとともに共同出版で成果を発信していくことに合意した。登壇者は、Myungkoo KANG, Sean SONG (Seoul National University) Yucheng LIANG (The Survey Center of Social Science, Sun Yat sen University .) Keun-sik JUNG, Chun-fang WU (Seoul National University) Shisei KIMURA (Konan Women' s University)。
研究成果・業績等	上記の成果は、発表資料集などでまとめられているが、2016年度以降、学術誌の特集号、日中韓の商業出版などをつうじて論文化・書籍化し、社会に発信する予定である。具体的には、次のようになる。 ①共同研究の成果を『ASIA REVIEW』（アジア研究所刊行の学術ジャーナル）特集号に掲載。 ②共同研究の成果を日中韓同時出版のかたちで書籍化。この件については、韓国のソウル大、中国の中山大学とすでに合意しており、日本においては、亜紀書房から『旅は東アジアを変えるのか』（仮）を出版することが確定している。

(A 4判2頁以内で作成してください)

2016 年 4 月 15 日
 受付番号 (5)

(参考) 平成 27 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
 成果報告書

(2016 年 4 月 28 日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2016 年 4 月 27 日

採択研究題目	戦後東アジアにおける市民社会と民主化の過程の相互影響関係							
講座・コース名	ジャーナリズム論、国際広報論、メディア文化論、国際地域文化論 東アジアメディア研究センター							
代表者	渡邊浩平							
連絡先	内線: 5283				email: koheiw@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	藤野彰 (ジャーナリズム論) 中国政治と中国社会の民主化実現の諸要因 西茹 (ジャーナリズム論) 中国メディア、公民社会、民主化 玄武岩 (メディア文化論) 日本の市民運動と韓国の民主化 金成玖 (国際地域文化論) 東アジア市民社会の国際化、グローバル化 周倩 (メディア文化論) 東アジアにおける中間層、市民社会の形成 渡邊浩平 (国際広報論) 日本の市民社会、市民運動							
研究協力者	(所属・身分)							
採択総額(千円)	600							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	室謙二	77440	台湾中	218670	謝金	20000	音 声 お	38354
	台湾中	182953	央研究				こし	
	院 3 名		院 3 名				チラシ、	104640
							ポス	
							ター	
	計	260393	計	218670	計	20000	計	142994
	予算総額 600,000－決算総額 573,657＝残金 26,343							
研究概要	本研究は、戦後東アジアの民主化の過程を相互影響関係のもとにとらえなおすことにある。平成 27 年度は、1960 年代の日本のベトナム反戦運動と、2010 年代に起こった台湾「ひまわり運動」、香港「雨傘運動」を取り上げ、講演会を開催。そのような事例研究をステップに、科学研究費の申請を行ったが、残念ながら、採択にはいかなかった。							
研究実績・内容	以下簡単に研究の背景を説明する。戦後東アジアの国際秩序は、冷戦体制と米国の圧倒的なパワーが覆うなかで、米国と日本、韓国、台湾との同盟による中ソ封じ込めが基軸となり展開した。本研究プロジェクトは、東アジア各国がそれぞれの政治体制のなかで、生成と発展、現状と理想を異にする「民主化」という政治プロセスをどのような過程を経て実現してきたのか、政治・経済・軍事的に協力、対立しながらも相互作用する市民社会から明らかにする試みである。周知の通り、日本はサンフランシスコ講和条約により主権を回復したが、米国との軍事同盟を結ぶ。冷戦構造のなか、中国大陆と台湾では共産党と国民党が対峙、朝鮮半島では南北が分断され、長く強権的統治がなされてきた。その後、アジア NIES の急速な経済成長により、台湾、韓国には中間層が形成され、社会構造が転換し、民主化が実現する。一方、中国大陆と朝鮮半島の北では、強権体制が続くも、中国大陆では市場システムが導入され、急速な経済発展を遂げた。1989 年の天安門事件に顕著に現れているように、民主化を希求する声は少なくないが、しかし、中国は「特色のある社会主義」を奉じて、世							

	界第二位の経済力を持つようになり、経済規模において米国の背中を伺うようになった。 こうした国際秩序に規定される東アジアの「民主化」における相互の影響関係を考えると、そこには国民国家形成、経済関係、さらには社会の変容や人の移動などにさまざまな影響が及んでいることが見える。東アジアでどのように「民主化」が成し遂げられ、その価値を共有しうるのか。各国の歴史に遡って検証する必要がある。東アジアの国・地域は政治・経済・軍事的な結びつきを強めながらも、「民主化」が一国単位の政治過程を通してのみ進んできたのではなく、市民社会による国境を越えた相互影響関係、連動に注目する必要があると考えた。 その事例として、まず、1960 年代日本で起こったベトナム反戦運動とその後の韓国民主化支援運動や、アジアとの「連帯」の動きを抑え、2010 年代に香港、台湾で発生した「ひまわり運動」や「雨傘運動」を事例として取り上げて、時代背景のもとに考察することとした。 共同研究補助金は、科学研究費基盤研究 B の応募にあたり、研究課題を深め、全体を統合する課題を絞り込み、方向性を見出すための研究プロジェクトであったが、しかしながら、先に述べた通り採択にはいたらなかった。
研究成果・業績等	平成 27 年度は以下の二件の講演会を行った。 1、元ベ平連活動家による講演会 10 月 17 日に本学院で、元ベ平連活動家で、脱走米兵の支援にも携わった室謙二氏を招聘し、以下のタイトルで講演会を開催した。「1970 年代の「アジアとの連帯」とは何だったのか - ベトナム反戦運動（ベ平連）から韓国民主化支援運動へ -」。講演では、60 年代の日本の若者層のアジアに対する知識の欠如や、ベ平連運動を牽引した小田実氏のアジアへの傾斜、鶴見俊輔氏と詩人・金芝河氏との交流、さらに、武藤一羊、鶴見良行氏によるアジア太平洋資料センターの設立などの歴史的事実の確認と、それらの活動を支えた時代の空気が語られた。特に、ベ平連が組織ではなく、運動であった点、その後のアジアとの「連帯」が、アジアの人々の暮らしを知る、一緒に食事をするなどの、「小さな連帯」が重視された点が、フロアを交えて議論となった。 2、講演会「台湾、香港の若者の意識とソーシャルメディア」 台湾、香港の社会学者を招いて、台湾の「ひまわり運動」、香港の「雨傘運動」の事例分析と、そこにおけるソーシャルメディアの果たした役割についての講演会を行った。それぞれの講演タイトルは以下の通り。呉齊殷（台湾中央研究院社会学研究所副所長）「台湾のひまわり運動と変化する若者のナショナルアイデンティティ」、李宗榮（台湾中央研究院社会学研究所副研究員）「ジェネレーションギャップ ソーシャルメディアと信頼 東アジア社会調査分析から」、江彦生（香港中文大学社会学部助教）「太陽の下如雨傘とひまわり ソーシャルメディアと香港、台湾の学生運動」。台湾、香港の社会運動は、両者ともに、影響力を拡大する中国大陆への反発として発生し、その際に、ソーシャルメディアが大きな役割を果たした。同時に、台湾、香港の二つの地域は固有の問題を持っており、同じ地平で語れない点などが紹介された。今後、拡大する中華を考える際に、「ひまわり」後、「雨傘」後を注視していく必要があるという認識を得た。 当初、オーストラリア国立大学の教員を招聘し、シンポジウム「東アジアにおける民主化と社会運動（仮題）」を開催することを申請書に記載していたが、資金的また時間的余裕がなくなり、昨年度は開催できなかった。しかし、平成 28 年度の全学の外国人教員招聘申請が採択となり、ANU のテッサ・モーリス・スズキ、トム・クリフ、ウェイ・シューゴの 3 氏の招聘が決まり、さらに、ANU 日本研究所サイモン・アベネル所長もあわせて招き、平成 28 年 7 月 29 日に、上記の趣旨のシンポジウムを開催することとなり、現在準備を進めている。それらの実績をもとに、来年度の科学研究費の申請を行う。 以上

受付番号 ()

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2016年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2016年4月25日

採択研究題目	拡張現実の時代における〈場所〉と〈他者〉に関する領域横断的研究							
講座・コース名	観光文化論講座・メディア文化論講座・観光創造論講座							
代表者	岡本亮輔 (メディア・コミュニケーション研究院・観光文化論講座)							
連絡先	内線: 5392				email: okamoto@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	岡本亮輔 (観光文化論講座) 現代の聖地と場所論、自己/他者論 山田義裕 (観光文化論講座) 現代コミュニケーションと自己/他者論 清水賢一郎 (観光文化論講座) 時間の現象学と場所論、自己/他者論 金ソンミン (観光文化論講座) メディア文化と自己/他者性、境界の政治学 西村龍一 (メディア文化論講座) 現代メディア文化と場所論、自己/他者論 増田哲子 (メディア文化論講座) 視覚メディア文化と自己/他者論 奈良雅史 (観光文化論講座) 中国ムスリムの観光実践 山村高淑 (観光創造論講座) コンテンツツーリズムの場所論 内田純一 (観光創造論講座) SNS・拡張現実(AR)の情報論 張 慶在 (国際本部・学術研究員) コンテンツツーリズムと場所論							
研究協力者	石川美澄 (観光創造専攻・D3) シェア/ゲストハウスの場所と他者 平 侑子 (観光創造専攻・D3) 動物園をめぐる自己/他者性 加藤康子 (国メ専攻・D3) アート系コミュニティの場所と他者 福浦友香 (観光創造専攻・D3) ソーシャルファブと自己/他者 鎗水孝太 (観光創造専攻・D3) コスプレ/コンテンツの場所性 山崎 翔 (観光創造専攻・D2) 音楽フェス研究、場所論 長田大夢 (国メ専攻・D1) ネットコミュニケーションにおける「作品」概念と自己/他者							
採択総額 (千円)	700							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	招聘旅費	153			書籍	414		
					謝金	65		
					備品等	68		
	計	153	計		計	547	計	
	予算総額 700 - 決算総額 700 = 0							
研究概要	本研究では、情報空間の拡充によって現実空間が多層化される現状を拡張現実の時代としてとらえ返す。そして、そうした社会状況下で生じるコミュニケーションや対人関係の変容を、メディアと観光を手掛かりに考察することを目的とする。							
研究実績・内容	2015年度は、「拡張現実」という新たなテーマ設定の理論的輪郭を明確にすることを主な目的に11名の研究者を招聘して研究会を行った。また、予算は、9月にステップアップの資金が別に配分されたため、研究者招聘には主にそちらを利用した。 ・西垣通 (東京経済大学)「基礎情報学にもとづく社会的意志決定」 ・東賢太朗 (名古屋大学)「喪失を嘆き、楽園を消費する——フィリピン・ボラカイ島のビーチリゾートより」 ・田中孝枝 (多摩大学)「テーマパークとしての「楽園」——中国人団体観							

	光ツアーを動かすメカニズム」 ・市野澤潤平（宮城学院女子大学）「栄耀の失樂園——タイのビーチリゾートに見る「樂園」観光地」 ・鈴木謙介（関西学院大学）「空間の多孔化と観光現象のゆくえ——リア充時代のウェブ社会」 ・別所裕介（広島大学）「チベット・ヒマラヤ地域に分布する仏教聖地の観光開発と文化地政学」 ・門田岳久（立教大学）「地域開発と〈宗教的なもの〉の発見——沖縄本島南部の聖域化／観光化をめぐる」 ・土井清美（青山学院女子短期大学）「「どこに行くか」よりも「どう行くか」——関係論的視座から捉えたスペイン・サンティアゴ徒歩巡礼」 ・デラコルダ川島・ティンカ（山口県立大学）「観光化する聖地——メジュゴリエと長崎の事例から」 ・塚原伸治（茨城大学）「地方都市商店街の100年——ポスト「三丁目の夕日」時代の商店街をめぐる」 ・有本尚央（甲南女子大学）「観光化される祭りと「地域社会」——現代の祭りは、なにかの役に立つのか？」
研究成果・業績等	①岡本亮輔「ダークツーリズムから見る聖地巡礼——カトリックの聖遺物と主観的真正性」『立命館大学人文科学研究紀要』110号、2016年3月。 ②鈴木正崇・五十嵐太郎・岡本亮輔「鼎談 人はなぜ聖地にひかれるのか」『宗教と現代がわかる本2016』平凡社、2016年3月。 ③岡本亮輔「「聖地」と「世界遺産」が好きすぎるニッポン人——物語化する観光がはらむ“アブない一面”」『現代ビジネス』講談社、2016年2月。 ④奈良雅史「動きのなかの自律性——現代中国における回族のインフォーマルな宗教活動の事例から」『文化人類学』80(3): 363-385、2015年12月。 ⑤奈良雅史『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社、2016年2月。 ⑥庄孔韶（奈良雅史訳）「雲南小涼山彝族による盟誓儀礼の意義」『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』国立民族学博物館調査報告（SER）136: 297-313、2016年3月。 ⑦Yamamura, Takayoshi. 2015 'Revitalization of Historical Heritage Using Pop Culture in Japan: Shiroishi City and the Game/Anime Sengoku Basara', Tourism Analysis, Vol.20, No.3, pp.327-332 (DOI: http://dx.doi.org/10.3727/108354215X14356694891933). ⑧山村高淑・シートンフィリップ他編『コンテンツ・ツーリズム研究の射程～国際研究の可能性と課題』CATS 叢書第8号、北海道大学観光学高等研究センター、2016年3月。 ⑨ 山村高淑「なぜアニメと伝統文化・歴史遺産は相性が良いのか——新旧文化のダイナミックな関係性」『まほら』No.84, 旅の文化研究所, pp.14-15、2015年7月。 ⑩山村高淑「『アニメ×地域』共同プロモーションの鍵を探る」『CharaBiz+』Vol.45, キャラクターデータバンク, pp.4-5、2015年4月28日。

（A4判2頁以内で作成してください）

2015 年 4 月 7 日

受付番号 ()

(参考) 平成 26 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金

成果報告書

(2015 年 4 月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2015 年 4 月 日

採択研究題目	トランスナショナルな公共圏におけるメディア文化とアイデンティティ 〔記憶と和解〕						
講座・コース名	メディア文化論						
代表者	浜井 祐三子						
連絡先	内線: 5378		email: hamai@imc.hokudai.ac.jp				
共同研究メンバー	浜井祐三子 (研究統括) <記憶・歴史・メディア班> 浜井祐三子、原田真見、玄武岩、竹中のぞみ、 ジェフ・ゲイマン、渡辺浩平、長井裕子 <記憶・表象・メディア班> 西村龍一、増田哲子、金ソンミン、宇佐見森 吉、田邊鉄、周セイ						
研究協力者	(所属・身分) なし						
採択総額 (千円)	150 (採択時 300 を年度末に 150 に減額)						
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項 金額
	国内旅費 (石 氏招聘)	17.1			謝金 (石氏)	20	
	国内旅費 (石 田氏招聘)	38.160			謝金 (石田 氏)	40	
					書籍	34.765	
	計		計		計	60	計
	予算総額	150.000	決算総額	150.025	= -0.025		
研究概要	2011 年度から、「トランスナショナルな公共圏におけるメディア文化とアイ デンティティ」のテーマで共同研究を行ってきたが、2 年前からはコア テーマとして「記憶と和解」を設定し、歴史認識論争、メディアに表象さ れる記憶、記憶の展示と顕彰など多様なメンバーの関心のもとに、記憶と メディア、および現代社会におけるアイデンティティの問題に取り組んで きた。						
研究実績・内容	本年度は、ここ数年取り組んできた研究を、論文集の書籍出版という形で 世に発信するための準備年と位置づけられた。大きくわけて二つのことを 行った。 1、これまで続けてきた研究会の開催の継続 2、論文集出版に向けての話し合い、論文の執筆 特に 2 は、今年度形になって成果の出るものではないが、来年度の書 籍出版に向けて、意味のある書籍出版 (成果公開) とするため、必要 なプロセスであると考えたため、1 年の年月をかけて行った。						

	それぞれの日程と内容を以下に示す。 1. 研究会の継続 外部講演者を招いての講演会（2015 年 10 月 9 日） 講師：石 純姫（苫小牧駒澤大学国際文化学部教授） 講演テーマ：東アジアにおける記憶と表象～近代期のアイヌ民族と朝鮮人の繋がりを中心に 研究会①（2015 年 11 月 9 日） 発表者：周 倩 発表テーマ：空間的消費における西洋の「記憶」～日中比較研究を通じて 研究会②（2016 年 1 月 20 日） 発表者：藤野 陽平 発表テーマ：台北にて日本人妻と日本語族台湾人が集う場～キリスト教系日本語デイケアセンター玉蘭荘の事例から 2. 論文集出版に向けての話し合い、論文の執筆 年度当初の予定は以下の通りであった。 2015 年 4 月～7 月 テーマの確定、執筆者の決定、章立ての検討 2015 年 8 月～12 月 執筆（各執筆者） 2015 年 1 月初め 初稿脱稿 2016 年 1 月～3 月 提出された初稿の内部査読、修正 2016 年 3 月末 脱稿 個々のメンバーの業務が多忙であったため、また今年度から新たに加わったメンバーもあり、全く予定通りとはいかなかったが、概ねこのスケジュールに沿って話し合い、個々の論文の執筆、原稿の検討を行うことができた。 本の中心的テーマは「記憶、メディア、アイデンティティ」であり、それぞれ異なる研究分野から、記憶、そしてそれを形作るメディア、また記憶の社会的機能（と、とれと深く関連を持つアイデンティティの問題）にアプローチする論文集となる予定である。 2016 年 2 月 15 日には、東京から出版社の方（株式会社三元社の石田俊二氏）をお招きし、初稿の検討を行うとともに、書籍出版に向けての改稿を行う上でのアドバイスをいただいた。 現時点で、12 人のメンバーから論文集へ原稿の提出が予定されており、2016 年度には、書籍出版のための助成を申請したいと考えている。
研究成果・業績等	上記の通り、今年度は来年度の書籍出版に向けての準備が主であったため、今年度形にできた成果は少なかったが、本共同研究をきっかけに企画された公開講座が、「民衆・記憶・アート」というテーマで 2015 年 10 月 7 日～11 月 4 日の間に開講され、メンバーのうち 5 名（増田、渡辺、西村、宇佐見、長井）が講師として授業を担当し、多くの一般市民の方々が受講した、

（A 4 判 2 頁以内で作成してください）

2016 年 4 月 15 日
 受付番号 ()

(参考) 平成 27 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
 成果報告書

(2016 年 4 月 28 日締切。総務担当へ電子提出する。) 提出日 2016 年 4 月 28 日

採択研究題目	文法化と意味変化のメカニズムの研究							
講座・コース名	言語習得論分野・言語伝達論分野							
代表者	上田雅信							
連絡先	内線: 5111				email: ueda@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	飯田真紀 (言語伝達論分野・准教授) 李鳳 (言語習得論分野・助教) 平田未季 (秋田大学国際交流センター・助教)							
研究協力者	村山友里枝(国際広報メディア・観光学院・博士課程 3 年) 楊雯淇(国際広報メディア・観光学院・修士課程 2 年) 日高慶美(国際広報メディア・観光学院・修士課程 2 年) 西山さとみ(国際広報メディア・観光学院・修士課程 2 年) 林恒立(国際広報メディア・観光学院・博士課程満期退学)							
採択総額 (千円)	600							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	学会発表	14	学会発表	225	講演謝金	105		0
	講師招聘	125			論文校閲	51		
	研究打合	58			図書費	22		
	計	197	計	225	計	178	計	0
	予算総額 600		－ 決算総額 600		＝ 0			
研究概要	これまで文法化には様々な意味変化が含まれており、文法化の概念はカバーターム的な性質を持っていて、不明確であることが度々批判的に論じられてきた。本共同研究では、概念的意味と手続き的意味を区別する関連性理論の観点から文法化のメカニズムを再検討することを目的として、中国語(広東語)の文末助詞 (終助詞)、韓国語のヘッジ表現、日本語の指示詞、談話標識、前置き表現、副詞、格標識、英語の間投詞の文法化と手続き的意味に関わるテーマを記述的、理論的な観点から広く考察した。							
研究実績・内容	以下の言語学セミナー、研究発表会、学会発表を行った。 ・2015 年 8 月 2 日 研究発表会 (発表者: 楊雯淇・日高慶美・西山さとみ・李鳳・平田未季・村山友里枝・飯田真紀・上田雅信) ・2015 年 8 月 3 日 言語学セミナー (3 回の連続講義) 吉村あきこ (奈良女子大学教授): 「コミュニケーションとことばー関連性理論の手続き的コード化に注目してー」 ・2015 年 10 月 17 日 韓国日本語学会第 45 回国際学術大会(韓国全州大学)での口頭発表 (研究成果・業績等に記載) ・2016 年 3 月 6 日 研究発表会 (発表者: 楊雯淇・西山さとみ・李鳳・平田未季・林恒立・村山友里枝・飯田真紀・上田雅信・保坂道雄 (ミニ講演)) ・2016 年 3 月 7 日 言語学セミナー (3 回の連続講義) 保坂道雄(日本大学教授): 「文法化と機能投射構造の創発」							

研究成果・業績等	<論文> ・ Ueda, Masanobu (2016) “On the Current Status of Biolinguistics as a Biological Science,” Fujita, Koji and Cedric Boeckx eds. <i>Advances in Biolinguistics: The Human Language Faculty and Its Biological Basis</i>, Routledge, pp.170-186. ・ 飯田真紀(2015) 《粵語句末助詞“嘅 ge2”的兩種功能和交互主觀化現象》,《第十八屆國際粵方言研討會論文集》 孫景濤・姚玉敏主編,pp.113-127. 廣州:暨南大學出版社。(査読有) ・ 平田未季 (2015) 「なぜ『中距離指示』のソ系は『そこ』という形式で用いられることが多いのか—共同注意の確立と話し手による指示形式の選択—」『日本認知言語学会論文集』第 15 巻, pp.480-492. ・ 平田未季 (2016) 「コ系の意味の再分析—指示詞体系における新たな最小の意味的対立—」『国立国語研究所論集』10 号, pp.19-39.(査読有) <講演・学会発表> ・ 上田雅信「生物言語学：近代科学としての位置づけについて」 上智言語学会 30 周年記念特別講演シリーズ②, 上智大学. (2015 年 10 月 28 日) (招待講演) ・ 村山友里枝・上田雅信「目的語を標示する日本語の「に」と韓国語の「을/를」の対応関係について」 韓国日本語学会第 45 回国際学術大会, 韓国全州大学 (2015 年 10 月 17 日) ・ 飯田真紀「広東語の文末助詞 “gE2” の意味変化」日本中国語学会北海道支部例会, 釧路公立大学. (2015 年 9 月 11 日) ・ 飯田真紀「粵語裏「V 到 NP」的構式意義以及「到」字的功能擴張特徵」香港科技大学人文学部 Seminar (2015 年 9 月 21 日) (招待講演) ・ 飯田真紀「粵語裏“V 到 NP”的構式意義以及“到”字的功能擴張特徵」香港中文大學 中國文化研究所 吳多泰中國語文研究中心語言學講座 (2015 年 9 月 22 日) (招待講演) ・ 飯田真紀「粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化」第二十屆國際粵方言研討會, 香港中文大學. (2015 年 12 月 12 日) ・ 飯田真紀「終助詞(文末助詞)の機能と特徴 ～ 広東語・北京語・日本語の場合～」国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える —多層言語社会香港からの示唆」, 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院. (2016 年 3 月 8 日) ・ 李鳳「「カモシレナイ」のヘッジとしての機能について」韓国日本語学会第 45 回国際学術大会, 韓国全州大学 (2015 年 10 月 17 日) ・ 李鳳「「생각하다」の認知的モダリティとしての性質について」日本韓国語教育学会第 6 回学術大会、札幌市教育文化会館(2015 年 10 月 31 日) ・ 平田未季・山本真理「共同注意確立活動におけるア系の有標性:会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例」日本認知言語学会第 16 回大会, 同志社大学 (2015 年 9 月 13 日) ・ 平田未季「共同注意の確立過程における聞き手の負荷と話し手による指示詞の質的素性の選択」日本言語学会第 150 回大会, 大東文化大学 (2015 年 6 月 20 日) ・ 村山友里枝「有標性の概念を用いた目的語の格標示の学習困難度—日本人韓国語学習者のデータに着目して—」日本韓国語教育学会第 6 回学術大会、札幌市教育文化会館(2015 年 10 月 31 日) ・ 楊雯淇「日本語談話標識「なんか」について—手続きの意味による分析—」韓国日本語学会第 45 回国際学術大会, 韓国全州大学 (2015 年 10 月 17 日) ・ 日高慶美「日本語の謝罪表現「ごめん」のバリエーションについて」韓国日本語学会第 45 回国際学術大会, 韓国全州大学 (2015 年 10 月 17 日) ・ 西山さとみ「日本語の依頼表現に用いられる前置き表現とそのポライトネスについて」韓国日本語学会第 45 回国際学術大会, 韓国全州大学 (2015 年 10 月 17 日)
----------	---

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

受付番号 ()

(参考) 平成27年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2014年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2015年4月28日

採択研究題目	『ロシアとアジア太平洋地域：移住プロセスと異文化コミュニケーションの諸問題』							
講座・コース名	メディア文化論講座							
代表者								
連絡先	内線: 6939				email: usami@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	(所属・身分) 宇佐見 森吉 (メディア文化論講座教授) 翻訳確認、学生執筆指導 玄武岩 (メディア文化論講座准教授) 執筆 パイチャゼ・スヴェトラナ (学術研究員) 編集、執筆							
研究協力者	(所属・身分)							
採択総額 (千円)	130 千円							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
					翻訳: 中山 ウルフ 中地 シートン 宮下 片山 木下 平井	200 千円 186 千円 145 千円 270 千円 268 千円 66 千円 72 千円 90 千円		
	計		計		計	1,297 千円	計	
	予算総額 1,300,000 - 決算総額 1,297,676 = 2324							
研究概要	本プロジェクトの目標は、東アジア・極東ロシア地域における移住プロセスと異文化コミュニケーションの諸問題に関し、日本人、ロシア人、韓国人、アメリカ人、イギリス人の研究者が共同執筆する論集を刊行することにある。論集の編集は日本側からスヴェトラナ・パイチャゼ (メディア・コミュニケーション研究院学術研究員) とロシア側からイーゴリ・ワーリドマン (ノヴォシビルスク工科大学人文学部准教授) が行う。							
研究実績・内容	論集はロシア語版として、ロシア側の予算で出版される。ロシア語で刊行されることから、刊行にあたっては、日本側執筆者の論文もロシア語に翻訳することが必要となる。本補助金を申請した理由はその翻訳費用を捻出することにある。主な執筆者: (日本側のみ記す): スヴェトラナ・パイチャゼ (メディア・コミュニケーション研究院学術研究員)、玄武岩 (メディア・コミュニケーション研究院准教授)、フィリップ・シートン (留学生センター教授)、宮下雅年 (メディア・コミュニケーション研究院名誉教授)、ディヴィット・ウルフ (スラブ・ユーラシア研究センター教授)、中地美枝 (スラブ・ユーラシアセンター研究員)、澤田和彦 (埼玉大学教授)、イーゴリ・サヴェリエフ (名古屋大学准教授)、ピョートル・ポダルコ (青山大学准教							

	授)、中山大將（京都大学助教）ほか。以上に加えて学院院生（3 名）が参加した。
研究成果・業績等	助成金を使用してロシア語に翻訳を行なった論考は以下の通り： 中山大將 「サハリンにおける日本人：樺太日本人移民社会の形成と解体」（日本語/ロシア語） ウルフ・デービド ”Khorvat vs. Riutin : The Manchurian Intervention of 1917” （英語/ロシア語） 中地美枝 “Cross-Border Influences in Northeast Asia: The Development of Public Health in Inasa and Vladivostok in the 1860s-1890s” （英語/ロシア語） シートン・フィリップ “Memories Beyond Borders: Karafuto Sites of Memory in Hokkaido” （英語/ロシア語） 宮下雅年 “Homecoming Visits to Karafuto: How Is Home (<i>Furusato</i>) Reconstructed After a Long Absence?” （英語/ロシア語） 片山通夫 「タンポポは凍土（ツンドラ）に咲く」 （日本語/ロシア語） 木下裕子 日本で眠っていた 1920-30 年代ソヴィエトの絵本 （日本語/ロシア語） 平井健文 “Perspectives for Conserving Factory Sites in Sakhalin Region” （英語/ロシア語） 翻訳が終了したので、これからさらに編集を行ない、5 月末に出版社に提出し、10 月に出版される予定である。

（A 4 判 2 頁以内で作成してください）